インターハイ出場ならず

伝習館スポーツ

第９号
令和４年６月
伝習館高等学校
広報・中学募集課

第７５回全国高等学校陸上競技対校選手権北九州地区予選大会は６月１６日～１９日、ＳＡＧＡスタジアムで行われ、堤麟（３年東山中出身）と松浦衣吹（２年宅峰中出身）は、残念ながらインターハイへの出場はならなかった。

１８日に行われた８００ｍ予選では、自己ベストを更新し続ける好調な二人に、インターハイ出場の期待がかかったが、好記録続出のハイレベルな戦いに惜しくも敗退した。

本気だから「楽しい」

持ち前のねばり強さを発揮し、順当に北九州地区予選に進出した堤麟は、激しいポジション争いのレース展開に思うように力を発揮できずに８着となった。レース終了後、気持ちの整理ができたあとに、落ち着いた表情で「楽しかった」と語った。メンバー全員が「全国を狙って勝負をする」本気のレースを走れた喜びをかみしめて話した。「もう少し走れたかも」と悔しさをにじませる表情も見えた。この経験を生かして「これからも陸上を続けたい」と語った。

「全国」が視野に

先輩にも物怖じせず、急成長で最終予選進出を勝ち取った松浦衣吹は、福岡県ナンバーワンの青木の後ろにぴったりと付くレースを展開した。最後まで粘る走りを見せたが、ゴールは7着だった。先輩同様に、レースは「楽しかった」と話した。「日本選手権に出場するような選手の実力がよく分かった」「来年は絶対に」と強い言葉が印象的だった。

「夢」は後輩に

一旦、陸上から離れることになる堤は、「陸上をやって来て良かった」と改めて話してくれた。となりに座る松浦には「２年生でこの大会を経験できたことはすごい」と褒め称えた。また、「２年生は、実力のある選手が多いので、全国目指して頑張って欲しい」とも語った。最後は、笑顔で「勉強を頑張ります」と宣言した。

松浦は、「堤先輩がキャプテンだったからチームが一つになって頑張れた」「これからは、自分がチームを引っ張ります」と先輩と固い約束を交わした。

地道な努力

高校駅伝を目指し強化する私立高校がしのぎを削る中、中・長距離種目の８００ｍで、公立高校が、それも同じ高校の複数の選手が福岡県予選を突破したことは特筆に値することだ。

堤は、「文武両道」を実践する伝習館の代表選手の一人。チームのキャプテンでもあり、南部予選、県予選では１６００ｍリレーの走者も務めた。強靭な体力と精神力を持ち合わせていないとここまで到達できない。毎日約１０㎞を自転車で通い、自分自身をしっかりと追い込むトレーニングに加え勉強も怠らない。応援に行くと必ず「ありがとうございます」と丁寧に挨拶してくれる。

こんな先輩の背中を追いかけて、一緒に練習することで、後輩の松浦も一日々々成長していったに違いない。

「先輩・後輩」「ライバル」「同志」どの言葉もあてはまるすばらしい関係だ。

後田（創成館）大会新〉

８００ｍ決勝は、高校歴代２位の記録を持つ第一人者の後田築（長崎：創成館③）が１分４９秒１６の大会新記録でＶ２を達成した。スタートから積極的に飛び出した後田は、追いすがる昨年のインターハイ入賞の青木龍翔（福岡：大牟田③）との一騎打ちのレースを制し、１５００ｍとの２冠を達成した。３位までが大会新を更新し、インターハイ出場ラインの６位のタイムが５２秒台とハイレベルな戦いだった。

後田は、６月１１日の日本選手権８００ｍで高校生ながら６位入賞を果たし、今後の日本陸上界を担う人物として嘱望される選手。

陸上の格闘技

「陸上の格闘技」と言われる８００ｍ。トラックを２周する中距離走だが、転倒などのアクシデントが多く起こる競技。初めはスタートレーンを走るが、１周目の第２コーナーあたりからオープンレーンに変わり、ポジション争いが激しくなり接触が増えるためだ。欧州では陸上競技の中でも人気の高い種目で、ラップタイムで１００ｍ当たり１３秒をきる選手もいる。

陸上競技

北九州地区予選
〈男子〉
◀８００ｍ
予選
１組８着　堤　麟③　敗退
１分５９秒３４
２組７着　松浦衣吹②　敗退
１分５７秒４７

◆編集後記◆

気温が３０度を超えるＳＡＧＡスタジアム。編集長はこの競技場とは縁が深い（長くなるので省略）。陸上競技の厳しさと、その中で好記録を連発する高校生のすごさを感じていた。

男女ともに午前に予選、午後に決勝が行われる８００ｍ。２本ともにしっかり走りきる体力がないとインターハイ出場はない。「ハードな種目」と言えば、その決勝の直前に行われた七種競技の８００ｍ決勝だ。

七種競技とは、１日目に１００ｍＨ、走高跳、砲丸投、２００ｍ、２日目に走幅跳、やり投、８００ｍ、計７種目を二日間で行う競技。勝者は、「クイーン・オブ・アスリート」と称される。

２日間の死闘を繰り広げた最後の種目。本当に「最後の力を振り絞って」の表現にふさわしいレースが展開された。ゴール後に倒れ込む選手も。２組のレースが終わると、１組に出場した選手もゴール直後の選手に駆け寄り、出場全選手が健闘をたたえ合う。厳しい戦いを繰り広げた選手たちの間には、いつのまにかライバルを超えた連帯感が生まれているのだろう。競技を終えた選手達は手をつないだり、笑顔で抱き合ったり、肩を組んだりと、感動的なシーンが見られた。勝者も敗者もなくお互いに健闘を讃え合う選手たち。スタジアムの観客からは大きな拍手が沸き起った。競技場全体が感動に包まれるのが、男子の八種競技（高校生）とともに女子の七種競技だ。女子アスリートの強さと美しさが溢れる激しい戦いの中に「感動」。涙腺が崩壊。

伝習館は令和５年度に２００周年を迎えます

文武両道とは「讃え合うこと」！